

## 001 健

	作品名	出版社	著者	コメント	評価
1	嘘を もうひとつだけ	講談社文庫 Ⓜ520円	東野圭吾	ごく普通に起こったと思われる事故・事件の現場に立ち会った加賀恭一郎。そこで見つけた些細な疑問に人間心理の奥に潜む悪意を感じ、事件の真相をあばいてゆく。加賀はコロンボ的洞察力で事件を推理し、時に犯罪者の気持ちに同化し犯人に罪を納得させて解決する。事件そのものの解決よりふとしたきっかけで犯罪者になってしまう人間の心理分析が隠れたテーマになっている。 事件は表題作を含め5つ、「嘘をもうひとつだけ」マンションから転落したブリマドンナ、「冷たい灼熱」妻を殺され子供を連れ去られた男、「第3の希望」娘に体操選手の期待をかける母親の家で起きた殺人事件、「狂った計算」夫を事故で亡くした妻とその家を訪れ行方不明になった男、「友の助言」運転中に眠ってしまい事故を起こした加賀の友人。	
2	赤い指	講談社 1575円	東野圭吾	元々は短篇で発表され上記の短篇集に入るところを長編に書き改め、単行本として発刊されたもの。昨今、子供の殺害事件が社会を賑わせているが、この本は事件を起こした子供の家族が事件の隠蔽を謀るストーリー。その中に家族の葛藤、認知症の介護、引きこもりなどの諸問題を書きこんでいる。そのため読後感が暗くなる点、設定が現実的かどうかの疑問も残るが作者の力量で納得できる形にはなっている。	
3	赤々煉恋	東京創元社 1680円	朱川湊人	人を想う気持ちの様々な形態を幻想ホラーの形でまとめた5つの短篇集。恋愛というよりは情念と幻想の世界。いつものホラー色が薄いので自分には合わないが簡潔な文章とストーリーの流れで読み応えはまあまあ。 「死体写真師」 死んだ妹の姿を美しく残したいと願う姉、 「レイニーエレーン」 雨の日は情事の場に現れるというエレーンという女性の霊、 「アタシの一番欲しいモノ」 自殺した少女が霊となって欲したもの、 「私はフランス」 手や足など切断された身体に異常な執着を持つ者たち、 「いつか静かの海に」 月の石を元に月の女性を育てている人間に出会った少年。	

4	さよならの空	角川書店 1575円	朱川湊人	空中に散布することによりオゾンホールを食い止める科学物質ウェアゾンが開発されたが散布により夕焼けが無くなることがわかり世界中で混乱が起きる。開発者の80代の女性科学者テレサはウェアゾン散布のため日本を訪れていたがイエスタディと名乗るテロリストに狙われていた。テレサはある目的のため警備をかいぐり街に出る。そこでテレサは夕焼けを嫌うトモルという小学生に出会う。いろいろな伏線を張り巡らしクライマックスまでのストーリーは巧みだがポイントは夕焼けが無くなって困るかどうかということに尽きる。
5	まほろ駅前 多田便利軒	文藝春秋 1680円	三浦しをん	映画「真夜中のカウボーイ」、「スケアクロウ」のように異なる人生観を持つ二人の主人公が互いに心を開いてゆく友情小説。まほろ駅の描写から察するにモデルは町田と思われる。そのまほろ駅近くで便利屋を営む多田啓介はひよんなことからかつての高校の同級生である行天春彦と出会う。行天は変人で知られており好ましく思っていた訳ではなかったが居候を決め込まれ役に立たないながらも便利屋の仕事を手伝うようになる。便利屋という仕事を通し街の人たちとつきあい複雑な人間関係に巻き込まれて行く。作品はやがてライトタッチのハードボイルド風に変化し問題を一つ一つ解決してゆく過程での主人公たちの過去に触れながら心の変化を描写。ストーリーのリアリティーが気になるものの読後感は爽やかさの方が優る作品。
6	三四郎はそれから門を出た	ポプラ社 1680円	三浦しをん	題名は夏目漱石の「三四郎」「それから」「門」を並べてつけたもの。本の内容は書評とエッセイ自ら読書好きを自認し書評で原稿料を貰うのが心苦しいともいう。性格はかなり男っぽく必要以上に開けっぴろげな性格。読んでいて女性とは思えなくなるほどに赤裸々に書きちゃうところがなかなか。
7	UDON オフィシャルガイド	講談社 1365円	「1週間」編集部 編	2006年8月26日から封切される東宝映画「UDON」の公式ガイド。監督:本広克行、主演:ユースケ・サンタマリア、小西真奈美、トータス松本。
8	北朝鮮利権の 真相	宝島文庫 680円	野村旗守★編	歴代訪朝団、進歩的メディア、左派政党、広域暴力団など「無法国家」北朝鮮をのさばらせてきた人々のスキャンダル・裏面史をまとめたもの

9	名もなき毒	幻冬舎 1890円	宮部みゆき	冒頭起きるコンビニの飲料に毒物を混入する手口を使った連続無差別殺人事件。一方、「誰か」で財閥の逆玉の輿に乗った杉村三郎が勤める企業広報誌の編集部を解雇された女性アルバイトが繰返し起こす復讐行為。杉村は解雇問題に決着をつけるため女性アルバイトの原田いずみの身辺調査を始めるがその過程で二つの事件が奇妙な形で絡んでゆく。事件に共通するのは自分だけが幸せになれないという疎外感。自分を受け入れてくれない周囲への怒り。これらが育てた心の毒がもたらす理不尽な行動。やりきれない感情が交錯する中にも脇役の見せる人情を描くところが宮部作品らしい。
10	ブタの丸かじり	文春文庫 ㊦510円	東海林さだお	病院の図書コーナーから借りたもの。ご存知丸かじりシリーズ。食べ物に関する店、料理について著者の心の動き、思い入れを含め感想・意見を述べる。くだらないと言えばくだらないのであるがここまで細かく観察して感想を言えるのも才能だなあと思ってしまう。
11	「新国民食」 吉野家	廣済堂文庫 ㊦550円	山中伊知郎	本書は、BSEで大打撃を受ける前に書かれたもので「うまい、早い、安い」のキャッチフレーズで一世を風靡した吉野家の歴史、牛丼に隠された秘密、業務マニュアルを明らかにしたもの。但し独特の味についてのレシピだけは当然ながら明らかにしていない。 それにしてもあれだけBSE問題を批判していたマスコミが牛丼販売再開を快挙のように取り上げる姿勢はちょっと理解できない。 本書によれば吉野家が全国的にチェーン店化するのは昭和48年のことであるが創業は明治32年と思いのほか古い。この本には牛丼の飯の重量、盛り方から片手出し禁止などのマナー、サイドメニューの出す順番など考え抜かれた店内マニュアルなど細かい部分についても触れておりBSE問題がありながらも人気のある秘密がよくわかる。またライバル店のすき屋、松屋が実は吉野家からの枝分かれ店と知り意外だった。
12	カクレカラクリ	メディアファクトリー 1000円	森博嗣	コカ・コーラ120周年を記念した書き下ろし作品。TBS系にてドラマ化があらかじめ決まっている作品なので期待して購入したが内容的には外れちゃったかという感じ。ドラマもカラクリが持つおどろおどろしいところも無く単調だった。帯には天才カラクリ氏によって120年後に作動するように仕掛けられた謎のカラクリ。何のために、どこにあるのか？とあるので大いに期待したがごく普通の宝捜しの謎解きのストーリーでワクワク気分にはなれなかった。

13	でか 刑事マガジン 2006	辰巳出版 1470円	タツミムック	不定期発行。刑事もののドラマ・映画の特集誌。 今回は 「スケバン刑事」、「犬神家の一族」、「ヅラ刑事」、 「相棒シーズン5」を中心に解説と出演者のインタ ビューを掲載。
14	俳句のくにから 木の一句	角川書店 1575円	有馬朗人 宇田喜代子 中原道夫 星野椿 三重県俳句協会 編	俳聖・松尾芭蕉のふるさと三重県が発信する全国 俳句募集の第11弾。17年度「木の一句」に寄せら れた応募作品約10万4000句の中から約5300句 を収録。作品をテーマ部門「木」と雑詠部門に分 けさらに一般・学生(小・中・高)、季節別に分類し て収録。優秀作品には賞金も出る。18年度は「山 の一句」を公募中。
15	十人の戒められ た奇妙な人々	集英社 1890円	倉阪鬼一郎	モーゼの十戒をキーワードにして綴るブラックユー モアの連作短篇集。パソコン世代を思わせる文章 のビジュアル効果などに本領を発揮する著者だけ に本の装丁も本のへりまで黒く塗るなどかなりのこ だわりが感じられる。ストーリーの構成は完結編の 十話目を除くとすべて同じ展開。精神に病んだ者 たちへ謎の宗教団体から勧誘を受け一つの戒律 を与えられる。そのごく簡単と思われた戒律を守る ことにより一時的に心の平安を手に入れるが次第 にその戒律が重しとなって破滅への道へと向かっ て行く。そのありさまを奇妙な笑い和不気味さで描 き、いつもながら全話読み終わる頃には嫌な後味 が残るあたりが著者の持ち味といえる。
16	いつも君の味方	講談社文庫 560円	さだまさし	さだまさしがこれまでに仕事や旅先で出会ってき た人たち、別れた人たちとの想いをエッセイにまと めたもの。内容はナガシマシゲオとのこと、料理屋 の女将、バンド仲間のこと、一本の酒との出会い が招く人との出会いなどほろっとくるもの、笑えるも のなど11篇にまとめている。
17	ハイテク からくり図鑑	文春文庫 ビジュアル版	中野不二男	子供の頃おもちゃの中がどうなっているのか気にな り、ばらして元通り組み立てられなくなってしまっ た経験を持つ人は多いと思う。 本書は日用品と飛行機、船舶、人工衛星など意 外なくみの共通点など興味を引く構成になって いるところ、日用品の中を写真や図解をふんだん に使ってわかりやすく説明しているところが良い。 例えばイカと電卓、紙オムツとコンタクトレンズ、ゴ ルフボールと戦艦大和等など。
18	裁判長！ここは懲役 4年でどうすか	文春文庫	北尾トロ	著者は古本屋の店主にしてライター。知人の民事 裁判の話に興味を持ち公判の傍聴をするようになり、 そこで繰り上げられるドロドロの戦い、判決の行 方などリアルな人間ドラマの中で印象に残った裁 判の模様を紹介したもの。事件の動機もさることな がらむちゃくちゃな言訳あり、検察と弁護士との駆 け引きなど著者の主観、客観を交えて書かれていて 面白く読める。